

## 保育園児に対する早期の防災教育について

今西 武

和歌山大学・防災研究教育センター 客員教授

### 1. はじめに

和歌山県は、近い将来、南海トラフ巨大地震の発生が危惧されていることもあり、学校（小学校・中学校・高校）と行政（主に教育委員会）が連携しながら、防災教育と防災訓練に取り組んでいる。筆者は文部科学省の「防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業」の学校防災アドバイザーを担当している関係から、総合支援事業に参加している学校（和歌山県内の5校と大阪府内の2校）に対して和歌山大学・防災研究教育センターが開発した防災教育のための実践的な各種のプログラムを提供し、その活動を支援している。また支援事業に参加していない学校にも防災教育のためのプログラムを提供し、その活動を支援している。また和歌山大学・防災研究教育センターでは、防災教育は早ければ早いほど教育効果が上がると考え、6年前から保育園を対象とした防災教育プログラムを開発（担当／筆者）し、主に和歌山市の公立保育園、私立保育園（幼保園も含む）を対象とした早期の防災教育に取り組んでいる。今回、保育園を対象とした早期の防災教育に焦点を当て、早期の防災教育の有効性について考察する。

### 2. 保育園における防災教育の現状

保育園の防災教育の現状を見ることにする。和歌山市の公立及び私立の保育園は、月に1回、定期的に、地震が発生した時の避難訓練、火災が発生した時の避難訓練、不審者からの避難訓練を交互に行なっている。地震発生時の避難訓練は、2才以上の園児を対象としている。津浪の心配のない内陸部の保育園では、地震が発生した想定のもと、保育士が「大きな地震だ！でも大丈夫だよ、頭守って、机の下に逃げるんだよ！」と声をかければ園児たちは、急いで椅子の下に身を隠す。次に揺れが収まったとの想定のもと、園庭に素早く避難する訓練が行なわれている。津浪の危険に晒されている沿岸部の保育園では、地震が発生し、大きな揺れがあり、津浪が襲来するとの想定のもと、保育士が「あっ！地震だ！机の下に逃げるんだよ！」と声をかければ園児たちは、急いで椅子の下に身を隠す。次に揺れが収まったとの想定のもと、「揺れていないね！でもね、大きな津波がやってくるから、いつもの避難場所に急いで避難するからね！」と声をかければ、園児たちは素早く園庭に避難し、保育園の避難場所に指定されている高台の避難場所に一目散に避難する。火災訓練では、園内で火災が発生したとの想定のもと、保育士が「あっ！火事だ！でも大丈夫だよ！ハンカチ口を押さえて落ちついて避難するよ！」と声をかければ、園児たちは煙対策としてハンカチで口を覆い、園庭の安全なところに避難する。不審者に対する訓練では、不審者に扮した園関係者が園内をうろつくと、数人の保育士が、“さすまた”などを

用い、不審者を動けないように制御し、別の保育士が警察に通報する。そして園児を安全な場所に誘導する係りの保育士が「みんな大丈夫だよ！先生（保育士）が、みんなを守ってくれているから、大丈夫だよ！今から安全な場所に避難するよ！」と声をかければ園児たちは、落ち着いて安全な場所に避難する。上記の訓練は、いずれも保育士が先頭に立ち（時には先頭と最後尾から）園児たちを安全な場所に避難させる。いずれの訓練も実践しながらの訓練で、小さな園児なりに訓練内容を理解し、一生懸命、訓練に取り組んでいる。このような保育園の防災訓練には、地域や学校の防災活動であまり見かけることがない特徴がある。保育園の防災活動は、以下の通りである。

- ①月に一回、上記の訓練が継続的に行なわれている。地域や学校ではこのような訓練は行なわれていない。防災訓練の基本は、参加型・体験型であり、継続性にある。したがって保育園の訓練は評価できる。
- ②訓練に対する園児たちの取り組み姿勢は極めて真面目である。
- ③幼い子供を預かっていることから、保育士の防災に対する意識は高く、訓練に取り組む姿勢は真摯だ。仕方なく参加する防災訓練は、訓練の成果を期待できない。
- ④保育園の訓練は、原則、園関係者が全員参加する。

地域の避難訓練でよく見かける光景は、毎回、同じような顔ぶれのメンバーが多く、メンバー以外の参加者が少ない。このような訓練では、災害時に対応できない。地域で行なわれる防災訓練は、できうる限り多くの住民が参加する必要がある。そして地域の防災情報は地域全体で共有する必要がある。

①～④の現状を見るにつけ、保育園の防災訓練のあり様を決して決して軽んじてはならないことが分かる。むしろ保育園の取り組みは、地域や学校の防災活動のより良き見本となり得る。しかし、多くの方は保育園の防災活動について無関心な事が多い。例えば、和歌山県のある市の高校で地域全体が参加（保育園も参加している）する防災訓練が行なわれた。その訓練の反省会の場で園関係者でない第三者が「園児たちの訓練は、無駄ではないのか？」と発言された。保育園側から反論があり、筆者もこの訓練と反省会に参加し、園関係者と園児が一生懸命に避難訓練する様子を近くで見ていることもあり、第三者に対し、「園児の避難の様子をご覧になりましたか？」と質問すると、「いや、実際に見ていない」とのことであった。幼い子（園児たち）は、訓練内容を理解できない、という誤った先入観による発言だった。前述したように保育園の防災の取り組みから、学ぶべきことは多い。

### 3. 保育園における防災活動の課題

そのような保育園にも幾つかの課題はある。その課題とは、①園児の保護者は、我が子が通う保育園の防災対策に関心が低いこと。②保育園関係者の防災に対する意識は高い。しかし保育園では、園児に対する防災教育用のプログラや教材が不足している。そのようなことから、防災教育のマンネリ化が避けられないこと。③園児向けの防災教育には映像

化されたプログラムや教材が欠かせない。しかし予算不足のため、保育園が映像化に必要な機器を購入できないでいる。課題は大きく分けてこの3点をあげることができる。

課題①について触れてみる。保育園において防災講座を開催する場合、園児の保護者（夫婦またはシングル家庭）は共働きということもあり、講座の開催日を土曜日または日曜日をお願いをしている。また事前に保育園から保護者に対し、防災講座の内容を案内して頂いている。その結果、保護者の多くが、勤めが休みにもかかわらず防災訓練に参加してくれている。訓練では、必ず保護者に災害時の保育園の避難場所をご存知ですか？と尋ねるようにしている。保護者に対し、保育園は文書や懇談会の席上で災害時の対応を伝えていながらもかかわらず、約半数の保護者は災害時の保育園の避難場所を知らない。そこで「知っている」と答えた保護者に徒歩で保育園の避難場所に行ったことがありますか？と質問すると、ほとんどの保護者は「行ったことがない」と答える。このこと一つとっても保護者の多くが、保育園の防災対策に関心が低いことが分かる。ちなみに保護者に対し、「ご家庭の避難場所をご存知ですか？と質問すると、約半数の保護者は「地域の避難所や避難場所を知らない」と答える。そこで「知っている」と答えた保護者に「徒歩で避難場所に行ったことがありますか？」と質問すると、殆んどの保護者は「行ったことがない」と答える。地域においても保護者の防災意識が低いことが分かる。

課題②は、多くの場合、保育園関係者が、「どこに依頼すれば防災教育の相談や教育のノウハウを教えてもらえるのかが分からない」「どこに依頼すれば防災教育の活動プログラムやグッズを入手できるのかが分からない」などの声が上がることが多い。その結果、従来から保育園でよく行なわれている定番の活動を継続せざるを得なくなり、活動のマンネリ化が避けられないでいる。そのことは保育園だけの問題ではないと思う。防災に係わる研究機関（大学など）の多くが、保育園などに代表される早期の防災教育プログラムと教材（グッズも含む）の開発に関心が薄いことから、早期の防災教育プログラムや教材が不足している。そのことが保育園の防災教育を進める上で課題となっている。たとえ早期の防災教育プログラムやグッズが開発されていても、その情報が広く社会に発信されなければ、保育園関係者にもその情報が届かない。そのことも課題の一つであると考え。上記の問題の解決には保育園と研究機関、双方の努力が必要だと考える。

課題③は、公立保育園の場合は、予算不足が課題のかなりのウエイトを占めている。例えば園児たちに対する防災教育では、園児たちに教育内容を分かりやすく伝える必要がある。上手く言葉で伝えることも大切だが、伝えたい内容をより分かりやすく伝えるためには伝えたい内容を視覚化する必要がある。現状は、視覚化された教材（DVD映像など）やグッズが開発されていても、多くの保育園は、予算不足のためDVD映像を再生するための機材（DVDプレイヤー・プロジェクター・スクリーンなど）が購入できないでいる。上記の課題①②③の課題を解決しなければ保育園の防災教育は停滞したままで終わる。課題の解決が急がれる。和歌山大学・防災研究教育センターでは、保育園の課題解決のために支援活動を行なっている。

## 4. 保育園に対する和歌山大学・防災研究教育センターの支援活動について

### 4.1 支援活動の目的

支援活動の目的は保育園の防災教育の課題を解決し、保育園の防災教育を活性化させることにある。和歌山大学・防災研究教育センターでは、6年前から保育園の防災教育の課題を解決するために各種のプログラムと防災グッズの開発に取り組み、開発されたプログラムとグッズを用い、保育園の支援活動を行っている。

### 4.2 支援活動の留意点

支援活動を実施するにあたり、幾つか留意している点がある。それは①園児たちに対する防災教育であることから、園児が常に興味と関心を持って楽しく防災を学ぶことに留意している。②保護者が気軽に保育園の活動（イベント）に参加できるよう、活動の実施日を可能な限り参観日に合わせている。参観日は、保育園により異なるが、土曜日・日曜日が多い。③防災知識を学ぶ座学の防災講座（知識吸収型）は大切だと思う。しかし災害時に役に立つ智慧を学ぶことも大切になる。そのようなことから、活動では園関係者、保護者、地域住民が、災害時に実際に役立つであろうと思われるプログラムを用い、参加型・体験型の防災訓練を行っている。それらの支援活動を - 園児と保護者のための - 「歌って、踊って、おいしく食べて、楽しく学ぼう防災対策」とネーミングしている。

### 4.3 支援活動で使用されているプログラム

#### 1) 防災ソング・プログラム

南海トラフの巨大地震を意識した防災ソング（ねぼすけナマズ＝紀北版・紀南版の2曲）と毎年のように和歌山県に上陸する台風に備えるための防災ソング（台風ロックンロール）を使用した教育プログラムである。園児は歌とダンスが大好きで、歌詞の内容を理解するのが早い。そのようなことから防災ソングのCDを作成し、さらに防災ソングにダンスの振り付けしたものを映像化（DVD映像／歌詞に合わせたイラストも作成済み）している。そして映像に使ったイラストを大型紙芝居にしている。

#### (A) ねぼすけなまず・紀北版（内陸バージョン）の歌詞

津浪に襲われることはないが、激しい揺れに対する対応方法を教えることを目的としている。

#### 1. でっかいナマズはいつも

おひげをのばして おねんね  
おいしいカレーのゆめをみた  
おなかがグウグウ めがさめた  
おおきなからだをブルブルブルブル  
じめんをふるわせブルブルブルブル  
あ～あ カレーがたべたいな

2. ねぼすけナマズが とびおきた  
じめんのしたで おおあばれ  
グラグラじしんだ たいへんだ  
まちじゅうみんなが パニックだ  
おおきなじしんが  
グラグラ ドッドーン  
もうれつ きょうれつ  
グラグラ ドッドーン  
つくえのしたに さあにげろ

～ 間奏 ～

「うえんうえんなかずにゆうきをだすんだよ だいじょうぶ きみならできるさ」

※間奏部分の台詞は、園児の心に響くようなオリジナルな台詞（園児に伝えたいメッセージ）に変更も可。

3. おおきなじしんが  
グラグラ ドッドーン  
もうれつ きょうれつ  
グラグラ ドッドーン  
すぐに すぐに すぐに すぐに  
もぐって もぐって  
あたま まもって つくえのしたに  
ゆらゆらすむと もうだいじょうぶ  
きつと きつと たすけにくるよ  
パパとママ！  
ほら たすけにきたよ  
パパとママ  
「よかったね」

(B) ねぼすけなまず・紀南版（沿岸部バージョン）の歌詞

津波から逃げるためには、いち早く避難しなければならないことを教えることを目的としている。

1. でっかいナマズはいつも  
おひげをのばして おねんね  
おいしいカレーのゆめをみた

おなかがグウグウ めがさめた  
おおきなからだをブルブルブルブル  
じめんをふるわせブルブルブルブル  
あ～あ カレーがたべたいな

2. ねぼすけナマズが とびおきた

じめんのしたで おおあばれ  
グラグラじしんだ たいへんだ  
うみからつなみがやってくる  
おおきなつなみが  
ゴッゴーン ドッドーン  
もうれつ スピード  
ゴッゴッーン ドッドーン  
にげろ にげろ さぁにげろ

～ 間奏 ～

「うえんうえんなかずにゆうきをだすんだよ だいじょうぶ きみならできるさ」

※間奏部分の台詞は、園児の心に響くようなオリジナルな台詞（園児に伝えたいメッセージ）に変更も可。

おおきなつなみが  
ゴッゴーン ドッドーン  
もうれつ スピード  
ゴッゴッーン ドッドーン  
すぐに すぐに すぐに すぐに  
はしって はしって  
みんなそろって さぁにげろ  
たかいところへ たかいところへ  
はしって はしって みんなそろって  
さぁにげろ  
そうさ おおきなつなみは  
にげるがかちさ  
「よかったね」

(C) 台風ロックンロールの歌詞

毎年のように和歌山県に上陸する台風に対する対応の方法を教えることを目的としている。

1. おれさまは たいふうだ うまれは みなみのたいへいようさ  
 どんどんどん ビッグになって あばれんぼうになったのさ  
 おれさまのあめは はんぱじゃねえぜ もうれつきょうれつ ザー ザー ザー  
 きょうふのどしゃぶり タイフーン
2. おれさまは たいふうだ ただいま 「わかやま おとうりだい」  
 ドン ドン ドン ドン いりよくをまして あばれんぼうになったのさ  
 おれさまのかぜは はんぱじゃねえぜ もうれつきょうれつ  
 ビュー ビュー ビュー  
 みんなすむまちが だいすきさ たいふうなんかまけてたまるか まけないぞ  
 じっちゃん ぼっちゃん きみとぼく よわいひとたち まもってね  
 みんなそろって ひなんじょへ  
 ていぼうまもるのは おれたちだ りりしいかおの しょうぼうだん  
 ききいっぱつのていぼうに ちからをあわせ どのうつむ  
 つむ つむ つむ つむ どのうつむ  
 つむ つむ つむ つむ どのうつむ  
 おれはたいふうだ まいった まいった こうさんだ  
 おれのちからは へな へな へな  
 あばれんぼうが こねこになっちまった
3. たいふうにげさり につぼんばれだ あおぞらたいよう サン サン サン  
 「※きのかわ」しずかに ながれてる  
 ※の部分の歌詞は、防災ソングを使用する保育園の近くの川に変更する。  
 まちじゅうみんなて ていぼうまもった ちからをあわせて ていぼうまもった

## <DVDジャケット>



<防災ソング ねぼすけなまず(紀南版)>







#### 4.4 大型（A1サイズ）紙芝居・プログラム

防災ソングの中で使用されているイラストを用いた大型紙芝居で、園児が防災ソングの内容を確認・復習するための紙芝居・プログラム。

（一例）保育士が防災ソングの内容を大型紙芝居を使ってチェックする。

○○君、地震の場合は、どうするのかな？

○○ちゃん、津波は怖いよね。どうするのかな？

○○君、保育園の避難場所はどこかな？知ってるかな？

※保育士は伝えたいことを園児に質問し、園児がその質問に答える形式を取る。

このことは参観している保護者に対し、保育園の避難場所を伝えるためでもある。

#### 4.5 ペール缶コンロを使用した備蓄食糧の試食体験・プログラム

災害時の備蓄燃料としてペール缶コンロと薪を使用し、災害時の備蓄食糧を試食体験するプログラム。

保育園に限らず学校、地域、行政が主催する防災訓練で必ずといってよいくらい実施されているのが備蓄食糧の試食体験だ。試食体験では、都市ガスやプロパンガスがふんだんに使用されている。そして鍋も500人～1000人分の料理（一例、とん汁・カレー・うどんなど）が可能な大鍋が使用されていることもある。また料理の具（豚肉・牛肉・人参・ごぼう・たまねぎ・じゃが芋など）は、丁寧に下ごしらえがなされ、水道水も使い放題である。東日本大震災をはじめとして過去の大災害では、ライフライン（電気・ガス・水道）が破壊され、電気を除くライフラインが復旧するのに数ヶ月を要している。被災地では、ライフラインが復旧する間、ガスと水道が使えなくなり、厳しい生活を余儀なくされている。厳しい生活を凌ぐために飲料水の備蓄が叫ばれているが、燃料（熱源）の確保は、あまり論じられていない。和歌山大学・防災研究教育センターでは、ガソリンスタンドなどでよく見かけるオイル缶を再利用し、災害時のコンロを開発した。燃料は薪である。身近にコンロと薪さえあれば、備蓄されていた飲料水を沸かすことができる。そうすれば備蓄食糧（アルファ米など）を食べることができる。風呂に入れない場合、お湯で身体を拭くことができる。温かいお茶も飲める。赤ちゃんのミルクも作れる。冬季の厳しい寒さをどうにか凌ぐこともできる。小さなペール缶コンロと薪（薪でなくも木切れ・選定枝・木っ端も可）であるが、災害時には大きな役割を担うことができる。なおペール缶コンロと薪は、災害時ばかりでなく、日常的に使用することができ、その使用範囲は広い。ペール缶コンロを使用した備蓄食糧の試食体験・プログラムでは、防災訓練に保育園関係者、園児の保護者、地域住民が、園の屋外（園庭など）でコンロと薪とヤカンを使用し、火付けを行い、湯を沸し、その湯を使って備蓄食糧（アルファ米など）を食べられるようにする。当プログラムは、雨天の場合でも園内の軒下（狭いスペース）でも試食体験ができるように工夫されている。

#### 4.6 配食・プログラム

試食訓練で目立つのが、できあがった備蓄食糧を参加者が自由にとっていくことが多いことだ。配食する側もそれを是としていることが多い。被災地でこのような方法で配食すればトラブルになり、時には大喧嘩になることもある。そのことを私たちは知っておくべきだ。配食・プログラムでは、配食を受ける側が一行または二列に並び順に配食を受ける。このことは一見すると些細な様に思えるが、人は総じて食べることにうるさく、時には卑しくなる。配食訓練はなおざりにできない訓練である。

#### 5. 保育園児に対する早期の防災教育の実践例

和歌山大学・防災研究教育センターが協力し、和歌山市の保育園で実施された早期の防災教育の実践例を紹介する。

①開催場所／和歌山市立・宮北（みやきた）保育所

②開催日時／平成27年11月20日（金）

午前10時からお昼12時迄（約2時間）

③参加者／約100名（園関係者・園児・保護者・地域住民）

④使用プログラム

・防災ソング（3曲）

・大型紙芝居

・ペール缶コンロ＝3缶と薪＝約5束

備蓄食料（アルファ米／50人前×1箱＝50人前を100人分とする）

やかん（80×2缶）

⑤プログラムの進行

保育士が園庭においてペール缶コンロと薪で火を起し、そして湯を沸かし、備蓄食料の試食準備を行なう。（約1時間）

↓

教室において園児、園関係者、園児の保護者、地域住民が参加し、園児が防災ソング「ねぼすけナマズ＝紀南版・紀北版」「台風ロックンロール」を保護者に披露した後、大型紙芝居で防災ソングの内容を復習する。その際、保護者に対して園の防災対策についてQ&Aを行なう。

↓

保護者に対し、防災ミニ講座を実施（講座内容＝災害時のライフラインについて）

↓

園庭で保護者がペール缶コンロと薪で火付け体験。その様子を参加者全員が見学

↓

保育士と保護者の代表が、準備された備蓄食糧を参加者に配食する。

↓  
参加者全員で備蓄食糧の試食体験  
↓  
訓練の終了  
↓  
後日、園長と保育士（訓練の担当者）と反省会

### <防災教育の実践風景>



ダンス風景



ペール缶コンロ



大型紙芝居



試食風景

## 6 保育園児に対する早期の防災教育のまとめ

今後の防災活動で重要になるのは、保育園児、幼稚園児、小・中・高校の児童などの次代を担う世代に対する防災教育だ。各地で行われている防災啓発活動に参加して感じることは形骸化した活動が多いということだ。それらの活動は、一見すると積極的に取り組まれているように思えるのだが、実態は行政に依存した活動が多く、座学中心の講座、訓練のための訓練が幅をかかせている。私たちは、頭で分かっているにもかかわらず自ら体験しなければ行動に移すことはできない。にもかかわらず災害時に役立つ実践的な体験型の訓練が少なすぎる。このような活動を担っているのが自治会や自主防災組織だ。自治会、自主防災組織の会長や役員は、高齢者世代の男性が多く、災害時に地域のリーダーとして相応しい行動を取ることは難しいかもしれない。また災害時に最も力を発揮することができる世代（保

育園児の保護者などの世代) は、残念ながら地域の防災活動に対して無関心なことが多い。しかし次代を担う世代の児童・生徒たちが学校で受けている防災教育は、実践的な訓練や講座に変わりつつある。いやが上にも次代を担う若い世代の防災力に期待が集まる。さらにその活動を発展させようとするのならば、保育園児に対する早期の防災教育が必要となる。早期の防災教育により、園児たちが、防災の基本を無理なく楽しく学び、実践的な訓練に慣れ親しんでおくと、小学校、中学校、高校で行われている防災教育の効果が倍化する。園児に対する早期の防災教育は、園の防災対策を推し進めるばかりでなく、形骸化された地域の防災活動を活性化させることにもつながってゆく。